慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プルーストとゴンクール兄弟(I) : マチルド大公夫人のかげに
Sub Title	Proust et les Goncourt (I) : à l'ombre de la Princesse Mathilde
Author	稲葉, 竹俊(Inaba, Taketoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.447(38)- 460(25)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0460

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プルーストとゴンクール兄弟（Ⅰ）[1]

——マチルド大公夫人のかげに——

稲葉　竹俊

プルーストとゴンクール兄弟の関係が問題とされる場合，一般的には兄弟の『ゴンクールの日記』（以降『日記』と表記）に典拠したとされる，プルーストの2つのパスティッシュが主要な議論の対象となってきた。この2つのパスティッシュとは，1908年2月22日付「ル・フィガロ」紙に掲載された，ルモワーヌ事件を題材にした4つのパスティッシュの1つ，*Dans le Journal des Goncourt*（『ゴンクールの日記から』）と題されたテキストと，『失われた時を求めて』の最終巻，『見いだされた時』の冒頭，ジルベルトとのタンソンヴィル滞在の折，主人公の「私」が彼女から借りて読むことになるゴンクール兄弟の未発表日記（この未発表日記という想定自体，全くのフィクションなのだが）中のヴェルデュラン夫人のサロン訪問記の二つである。この2つのパスティッシュについてなされた諸研究[2]によって，その執筆時期やプルースト参照したと思われるゴンクールの諸テキスト[3]，さらに文体模倣が批評行為がプルーストの文学的営為において占めた役割[4]や『失われた時を求めて』のなかに挿入されたパスティッシュが，物語上どのような機能を果たし，またとりわけ『見いだされた時』において展開される文学論といかなる関係を切り結んでいるか[5]などを詳細に我々は知ることができるようになった。

しかし，意外なことにこれらパスティッシュ以外にも，雑誌などにプルーストが発表した批評文やサロン訪問記や書簡，さらには『サント・ブーヴに反論する』というタイトルで死後出版された諸草稿にしばしば散見されるゴンクールへの言及については，個別的な指摘はあるものの総括的な考察が行われてきたとは言い難い。

そこで本論全体は，これら2つのパスティッシュ以外のテキストや書簡に対象を絞り，そこから浮かび上がってくる，プルーストのゴンクール像の諸側面を年代を追って概観を試みるものである。とくに本稿では，ルモワーヌ事件パスティッシュ以前の時期を対象とすることにしよう。

1．ドーデー夫人宛書簡（1905）

1905年5月6日頃に書かれたとおぼしき，アルフォンス・ドーデー夫人宛の書簡の中で，夫人の自著『鏡と幻影』（*les Miroirs et mirages*）の献呈を受けたことに謝意を表明しつつ，プルーストはゴンクール兄弟の著作との関わりについて言及し，このように書いている。「小生は，ゴンクール兄弟の作品自体を直に知っているとはいませんし，またあなた様の家で見ることのできましたエドモン・ドゥ・ゴンクールの賛嘆すべき姿以外，兄弟の実際を知りません。また『18世紀芸術』などの作品に魅惑されることはありましたが，それを除けば，リュシアン（ドーデー夫人の子息）といくつかのページの幾分戯画的な側面（du côté un peu caricature de certaines pages）について笑い興じたくらいなのです。ですから，ゴンクール兄弟について語ろうとすれば，的はずれな事しか言えそうにありません」（Corr. XVII,536）。

実際，この書簡が書かれた1905年以前のプルーストの書簡や新聞や雑誌に発表した記事からは，プルーストがゴンクールの熱心な読み手であった痕跡を見いだすことは，そうたやすいことではなく，ドーデー夫人宛書簡中の上の発言は正直な感想であったかもしれない。

すでに1891年のストロース夫人宛の書簡の中に（Corr.I,163），『ジェルミニ・ラセルトゥ』への言及があるが，これは同名の小説を翻案した演劇バージョンであり，その年の3月21日にこの上演に出かけたプルーストのお目当ては主演を演ずる女優レジャンヌであった。この演劇体験はプルーストにとって実に強烈なものであり，その感動は彼にとって一生忘れ得ぬものであったことはよく知られている[6]。また1892年12月には，『シャルル・ドゥマイ』の演劇バージョンの初演が行われており，これについても

プルーストが無関心ではいなかったであろうと推測している研究者もいる[7]。いずれにしても，ことゴンクールの小説作品との関わりという点でいえば，プルースト本人がいうように，「直に知っている」とはそうたやすく言えそうもない。また，ゴンクールの『18世紀芸術』への言及が見られるが，この時期プルーストがこの著作を熱心に読んでいたことを裏付けるようような資料は見つからないものの，保苅瑞穂氏が指摘したように[8]，1895年の末頃に書かれたと推測されるシャルダン論（『シャルダンとレンブラント』[9]）を執筆するにあたって，この書を参照したという可能性はあると思われる。さらに，プルーストが，ドーデー夫人のサロンなどでエドモン・ドゥ・ゴンクールと同席したことことは，いくつかの書簡から確認することができるものの[10]，『日記』にはプルーストの名は一度として登場しておらず，まさに「賛嘆すべき」姿を見かけたにすぎなかったのであり，おそらくプルーストとエドモンの間には，ちょっとした会話が取り交わされる事さえなかったに違いない。最後に，プルーストがリュシアン・ドーデーと一緒にゴンクールのいくつかのページ——当然『日記』のいくつかのページ——について「笑い興じていた」とあるが，それはむしろエドモンと家族同然のつきあいのあったアルフォンス・ドーデ家の次男リュシアンの方からの促しに依るところが大きかったのかもしれない。

しかしながら，1905年のドーデー夫人宛書簡に端的に表現されていたこのプルーストのゴンクールとその作品に対する，ある種の「疎遠さ」と挿話的なアプローチと，1908年の『日記』の文体模倣　—文体の模倣にはその模倣対象への愛着ないしは少なくとも何らかの親近感が前提になるに違いない—，さらにはまた稿を改めて我々が議論の対象とするであろう『サント・ブーヴ批判』執筆にあたっての『日記』の詳細な読み，そして小説中にパスティッシュを挿入するにまでついには至った事態を，繋げる何かしらの契機をこの1905年周辺の時期に見いだすことはできないのだろうか。また，後年ゴンクールをめぐって展開された文学的営為を予見させるような，何かしらの兆候はないのだろうか。

2．マチルド大公夫人のサロン（1903）

このような観点から，「歴史的サロン　マチルド大公夫人のサロン」（*"Un salon historique. Le salon de S.A.I. la princesse Mathilde"*[11]）と題され，1903年2月25日に「ル・フィガロ」紙に掲載された文章が我々の関心を格別に惹く。この新聞記事は，プルースト本人の名前でなくドミニックという名前で発表された連続記事「パリのサロン」の第一回目にあたるものである。周知のように，『日記』において，マチルド大公夫人及びそのサロンに居合わせた人々の言動は，常にゴンクールの大いなる関心事であり，おそらくは量，質ともに『日記』の一つの白眉と言える部分を構成しているのであれば，すでに大公夫人のサロンというテーマ自体，『日記』との何かしらの関係を想像してみたくなる。事実，プルースト＝ドミニックは，この記事の中でゴンクールの名に数度に渡って言及し，また「いずれにしても，大公夫人の名はフランス文学の黄金のテーブルに刻まれている。メリメの『大公夫人への書簡』一巻全体，フロベールの数多くの書簡，サント・ブーヴの『月曜閑談』の一文，また『ゴンクールの日記』の器用というよりむしろ好意的といえる多くのページから，大公夫人についての最も感じがよく，最も高尚な人物像を抱くことができる」とも書いている[12]。しかし，これまでは，『花咲く乙女たちのかげに』の第一部「スワン夫人をめぐって」の中で，スワン夫妻が話者をマチルド大公夫人に紹介するという場面[13]をプルーストが執筆するにあたって，この記事の「再使用」がおこなわれたという点でこのテキストは注釈の対象となってきた。ゴンクールとこのテキストとの関係につて論じている唯一の例外は，我々の知る限りでは，ブイヤゲ[14]の行った注釈であり，それに部分的に基づきつつ，以下プルーストがこの記事を書くにあたって，『日記』をどのように読み，《利用》したかを明らかにしたいと思う。

ゴンクール兄弟は，知己，友人を著しく傷つけるような断片を削除して，生前シャルパンチエ社から『日記』を出版した。一方，削除部分を含む完全版の『日記』がロベール・リカットによってファスケルとフラマリ

オン社から日の目を見たのは，ようやく1956年の事であった[15]。後者の完全版における大公夫人の姿は，およそ好意的なものからはほど遠く，皮肉と揶揄，時には悪意に充ちていると言っても過言ではない。それに対して，プルーストが読むことができた前者の版においては，大公夫人の人格はおおむね肯定的な姿で描かれている。そこでの《常数》は男性的率直さとそれを和らげる女性らしい優しさの二項対立であり，このいわば両性具有的人物像が具体的な発現によって肉付けされる。前者は歯に衣着せぬ発言において最も雄弁に表現され，後者はイタリア的ともゴンクールによって形容される微笑みによって最高の形を与えられる。例えば1862年12月13日の『日記』(JII,71-72) では，彼女は，「比較しうるもののないほど優しい微笑，イタリア人の可愛い口元に浮かぶあのねっとりとした微笑のように愛想の良い女性」である一方，「気取りがなく，くだけた言葉で人を楽にし，思いついたことは何でもいってのける快活さを」持った女性であるとされる。また1865年 8 月16日の記述 (JII.290) では「我々は大公夫人の中に，今まで会ったことのある社交界のほとんどあらゆる夫人以上に，招待客に心を遣い，繊細に引き立てる，女主人を見たのである。我々は，あの自由さを，あのつっけんどうさの魅力を，[…] あの愚かしさを一刀両断に斬りつける見事さを，男勝りと女らしい細やかな気遣いのあの混合を […] 考えるのであった」とある。さらに微笑は「含みの多い，人間味のある愛想のいい魅力的微笑」と1867年 3 月 6 日の『日記』にはある (JIII, 106)。

一方，プルーストの記事の中では，大公夫人について「この誇り高い謙虚さと率直さ，またその表現の殆ど庶民的とも言える鷹揚さ」(CSB, 445-446) や「その目，微笑，そして客のもてなし全体からこぼれ落ちる極度の優しさが，男性的な粗野さを和らげている」といった記述があり，ゴンクール的な図式を踏襲しているように思える。また後年，『花咲く乙女たちのかげに』において大公夫人を描写する際にも，「すこし角の立つどちらかといえば男のようなその率直さは，しかし微笑がたたえられるとすぐに，イタリア人のもつ物思わしげな表情で和らげられた」(RTP I, 532)

という表現が使われ，この図式は維持される。実際に大公夫人のサロンを訪れ，夫人と親交を結んだプルーストにとって[16]，大公夫人の肖像を描くにあたって，その一部は実地の観察に基づいてはいただろうが，ゴンクールの大公夫人の肖像が，その観察の背後にあって，かなりの程度プルーストの視線を規定した可能性は，上のいくつかの例からも否定しがたいように思われる。

しかし，『日記』とこのサロン訪問記の間テキスト性は，女主人の肖像の類似にとどまるものではない。『日記』とこの記事について我々が行った照合の過程で，少なくとも2カ所『日記』からの借用が行われているということが明らかになった。ここでの引用は議論の性格上フランス語で行い，日本語訳は脚注に送らせていただく。

第一の借用は，サロンの常連だったテーヌがナポレオン・ボナパルトについての雑誌論文を書いたことで，大公夫人の逆鱗にふれ，絶縁に至った経緯に関する記述に関するものである。まず『日記』1887年2月16日の記述（J VII, 180）。

> « Je trouve la princesse, qui est un peu souffrante, exaspérée contre Taine, à propos de son article sur Napoléon Ier, qui vient de paraître dans la *Revue des Deux mondes*. Elle s'indigne de l'accusation portée par l'écrivain, contre Mme Laetitia, d'avoir été une femme malpropre, et s'écrie : Eh bien je ferai cela ... j'ai une visite à rendre à Mme Taine... je lui mettrai ma carte avec P.P.C... oui, ce sera prendre à jamais congé de lui. »[17]

続いて，プルーストのテキスト（CSB, 450）。

> « Elle (la Princesse) se brouille avec Taine, sur la fin de sa vie, à la suite de la publication de son *Napoléon Bonaparte*. Il lui avait dit : « Vous le lirez, vous me direz ce que vous en pensez. » Il lui envoya. Elle lut ces pages indépendantes et terribles où Napoléon apparaît comme une sorte de condotterie. Le lendemain, elle envoyait sa carte à Taine, ou plutôt mettait sa carte à Mme Taine, à qui elle

devait une visite, avec ces simples mots : « P.P.C. ». C'était sa réponse et la signification de ne plus avoir à revenir chez elle.»[18]

ゴンクールにおいては，大公夫人の怒りの原因が，その母へのテーヌの中傷であったのに対して，プルーストのテキストでは，ナポレオンへのそれへとすり替えられてはいるが，両者の類似性はあからさまであり，これを単なる偶然の産物考えることには，無理があるであろう。さらに，つけくわえるなら，このテーヌにまつわる逸話は，小説中のマチルド大公夫人登場の場面でもスワンと夫人の会話中に挿入されることになる点も指摘しておこう。

続いて第二の借用。1866年10月15日，大公夫人はゴンクールに自らの結婚のこと，ロシアのこと，ロシア皇帝ニコライのことなどについて回顧談を話してきかせる。

まず，彼女がドミドフ公と結婚したことに落胆したニコライ皇帝の言葉(J III, 74)。

« Jamais je ne vous le pardonnerai ! » c'est le mot avec lequel l'acceuille le czar, lorsqu'elle arrive mariée avec Demidoff. »[19]

かたやプルーストのテキストにおける大公夫人の結婚にまつわる記述(CSB, 452)。

« Quand elle arriva en Russie comme pricesse Demidoff, l'empereur Nicolas, son oncle, qui l'avait voulue comme belle-fille, lui dit : «Jamais je ne vous le pardonnerai. »[20]

さらにゴンクールが書き取った，ドミドフ公を忌み嫌う皇帝についての大公夫人の談話（J III, 76-77)。

« ...Quant à M.Demidoff, il ne voulait pas même prononcer son nom et ne l'a jamais prononcé. Il tombait chez nous à des dîners, sans gardes, sans escorte, des dîners terribles où il ne le regardais même pas... Enfin un jour arriva où l'Empereur me dit : « Pourquoi ne me faites-vous pas vos confidences ce soir ? » Et comme je ne voulais pas parler, il ajouta : « Quand vous aurez besoin de moi, vous me

trouverez toujours, adressez-vous directement à moi par le comte Orloff. »[21]

これに対してプルーストのテキストは以下の通りである（CSB, 452）。

« Il (l'empreur) haissait Demidoff, défendit qu'on prononçât son nom devant lui, et quand, de temps en temps, il venait à l'improviste dîner chez sa nièce, il ne regardait même pas son mari. Quand il la sentit malheureuse, il lui dit : « Quand vous aurez besoin de moi, vous me trouverez toujours ; adressez-vous directement à moi. »[22]

これらは，有り体に言えば，文字通りの引用であり，しかも出典への言及なき引用であり，その出典は『日記』以外ではあり得ない。おそらく，プルーストはこの記事を執筆するにあたって，大公夫人の肖像を参照するにとどまらず，さらに一歩進んで，サロン訪問記というジャンルにふさわしい，逸話や細部を『日記』の中に探していたのであろう。

以上，内容面からプルーストのサロン訪問記と『日記』との関係について，その類縁性を探ってきた。かたや，形式や文体についてこの両者の間に何かしらの共通点を見いだすことはできるのだろうか。『日記』の多くのページがサロンや晩餐をその場面としている事にまず注目しよう。これらのページの構成上のまた文体上の特徴がプルーストの記事にも何らかの形で反映しているのだろうか。

『日記』の社交場面において，我々が一般にゴンクールという名から想像し，またプルーストがそのパスティッシュで誇張して模倣してみせたような，いわゆる「芸術的文体」を見いだすことはきわめて稀である。むしろ文体は簡潔で，しばしば日記風のぞんざいさが，基調となる。その典型的構成は，各断片の冒頭に多用される《Dîner chez...》や《Nous dînons chez..》さらに《Chez...》から始まって，簡単な状況説明と主要参加者の紹介ないし名前のリストアップがある。その後，最大の情熱を傾けて記述されるのはその場で交わされた会話の抜粋，特に刺激的だったり滑稽であ

ったりといった，ゴンクール本人をまたは読者を何かしらの形で強く印象づけるような会話であり，それは殆どの場合，直接話法で，生の形で転写される。また，もうひとつの特徴として，これはブイヤゲも指摘していることだが[23]，各断片を通して動詞は現在形が一貫して用いられており，それによって諸場面の臨場感の再現が企てられる。

これらの特徴は，ある程度プルーストのテキストでも指摘することができるであろう。もちろん，ゴンクール的出だし（incipit）を新聞記事の出だしに使うことはできない相談であろう。この出だしは1908年のパスティッシュや『見いだされた時』に挿入されたパスティッシュにおいて模倣されることになる。しかし，臨場感を際だたせる現在形の使用は，この記事の目立った文体的特徴となっている。網羅的にそれらすべてを列挙することはできないが，例えば，テキストの導入部分の後，サロンの記述を始めるにあたっては，読者に呼びかけつつ「私に同行してベリー街にいらっしゃい，そして，あまりぐずぐずしないようにしよう。夜会はかなり早く始まるのだから」（CSB, 446）とあり，読者とともに夜会に赴き参加する，いわば臨場型の訪問記を準備する。その後テキストはこの訪問者とともに，夜会の場面に立ち会い，その場に居合わせる人々を，まさにその場で観察し，サロンの現在進行に同伴するという結構を付与される。例えば，「大公夫人の左側に置かれているテーブルで，ガンドラックス氏がいまひもといているのは，『ラ・ルヴュ・ドゥ・パリ』であろうか」（CSB,447）といった記述における「左側」や「いま」，さらに疑問文の使用によって，訪問者の主観性が顕在化する。テキストはやがてサロンの現在から離れ，サロンの過去の歴史の紹介へと一度は移行するが，「さて，かような思い出話にかかずらうのは，このくらいにしておこう。すでに大公夫人のサロンの扉は少し開き，そのままになっている」（CSB,448）という文で再び《現在》へと回帰し，いよいよ招待者の入室場面が，現在進行的に描かれ，サロン訪問記は臨場性を帯びる。このように現在の臨場性とサロンの歴史的奥行きへの遡行の共存がこの訪問記のスタイルであり，換言すれば『日記』的現在への執着とサロンの《connaisseur》のサロン来歴開陳趣味が

併用されているのだと言えよう。

また，このプルーストのテキストは塩味のきいた会話にも事欠かいてはいない。後年『ゲルマントのほう』で再使用されることになる[24]，塩を雪と勘違いして，「もう雪は降りません，大公夫人様」と主張し，その理由を尋ねられて「わかりますとも，大公夫人様，もう雪は降りません…もう降ることができないのです…塩がまかれたのですから」(CSB, 447) と答えて衆目の失笑をかった招待者の一人の馬鹿さ加減への皮肉な記述。さらに，フロベールから『ブヴァールとペキュシェ』朗読してもらったと吹聴した会食者が，大公夫人がそんなことがあり得ないと反論したのに対して，「はい，さようでございます。混同しておりました。『ブヴァール』を朗読してもらったことは間違えありません。しかし，大公夫人様のおっしゃることもごもっとも。『ペキュシェ』は朗読してもらっておりません」と答えた逸話など，直接話法での会話の転写がゴンクール的といってよいようなコミックな効果を生み出している例であろう。

以上，内容と形式両面から問題の2つのテキストを比較してきたわけだが，そこからどのような結論を引き出すことができるだろうか。

まず逆説的ではあるが，この1903年に書かれたこのテキストは後年書かれるパスティッシュとの比較において，最も『日記』のテキストの忠実な模倣であると結論できよう。ここでは，パスティッシュに特有の模倣対象へのイロニックな距離は措定されず，マチルド大公夫人についての『日記』のページのエッセンスを失うことなく，まとめてダイジェスト版を拵えたような趣がある。おそらくこの忠実な模倣を脱し，ゴンクールへ批判的な視点をプルーストが持ち得た時，パスティッシュが書かれ，さらには『失われた時を求めて』において，話者の文学上の啓示をえる過程の中で，むしろ批判的に乗り越えられる対象としてゴンクールが設定されえたのであろう。ゴンクールの文体に関する書簡中での言及が，1910年代からむしろ頻繁になっていくという事を考えあわせると，この文体に意識的な距離をおいた関係を，1903年時点でのプルーストは持ち得ていないといっても

過言ではないであろう。

では，いつ頃からプルーストはゴンクールを批判的に読むようになったのだろうか。これはあくまで我々の推測にすぎないが，それは1905年頃からのように思える。この頃，プルーストはゴンクールの文体に批判的な言葉を微かだが発し始めている。1905年6月6日から8日のいずれかの時に書かれたと思われるノアイユ夫人宛書簡の中でプルーストは，夫人の小説，『支配』を褒め称えて，「あなたは『支配』のなかで音楽について崇高なものをお書きになったようですね，その幻影が悲壮的な口つきを彫り込んでいるようだとお書きになりました——この「ようだ」(comme) はゴンクールの文体ですね，私がゴンクールの文体と言っているのは，このいま私が使ったcommeの使い方でして，決してあなたの前例のない，崇高な文体ではないのであしからず。あなたの文体はゴンクールの上，はるか3000メートル上に位置しており，ゴンクールとは何の関係も無いのですから」(Corr V, 211) と書き送っている。また，1905年8月15日には，ロベール・ドゥ・モンテスキウを称える「美の教師」(*"Un Professeur de beauté"*(25)) と題された文章を月刊誌『生活芸術』に発表しているが，この中で「モンテスキウ氏は絵画のことは何でも心得ているが，それに対し，氏が文章を書き出すや，氏はもはや一人の著述家でしかないということに留意すべきである。ゴンクール兄弟の最も見事な自然描写にさえも小さなしみのように残っている「薄上塗り」とか「厚塗り」とかのアトリエ用語は，氏の場合には，毛ほども見出せないだろう」(CSB, 518) とも書き記している。いずれも，ゴンクールに関する最も早い否定的な言辞である。

★　　★　　★

この稿の最初に我々は1905年8月のドーデ夫人宛の手紙を出発点にしつつ，その書簡で表明されたゴンクールへの疎遠さについて言及した。しかしその解釈については，もしかしたら，それを180度転換せねばならないかもしれない。マチルド大公婦人のサロン訪問記事（1903年2月）を背後で支えていた『日記』のプルーストの読みの網羅性，模倣の忠実性を考慮

に入れつつ，1905年に見られるゴンクール批判の最初の兆しを視野に置く時，「あのゴンクールについてはよく知りません」という言葉は，もはやそう素直に鵜呑みにできないのではないか。むしろ，この時期になってようやくプルーストの中に生じた批判的な距離感こそが，そこでは暗に表明されていたのかもしれず，あの疎遠さは1908年のパスティッシュに向けて縮めていく距離ではなく，さらに深化すべき疎遠さであったのかもしれない。

注

（1）『失われた時を求めて』からの引用文の出典表示は新プレイヤド版（1987－1989）に依り，RTPと略記した上で巻数をローマ数字で，ページ数をアラビア数字で記した。またプレイヤド版の『サント・ブーヴに反論する』（1971）の巻に収録されている文章からの引用はCSBと略記した上で，ページ数を記した。書簡からの引用は，フィリップ・コルブ編纂の『マルセル・プルースト書簡集』に依り，Corrと略記した上で，巻数をローマ字数字で，ページ数をアラビア数字で記した。『ゴンクールの日記』からの引用は，シャルパンチエ版（1887－1896）に依り，Jと略記し，巻数をローマ字数字，ページ数をアラビア数字で記した。

（2）Jean MILLY, *Proust dans le texte et l'avant-texte*, Flammarion,1985, pp.185-211 : « Le pastiche Goncourt dans Le Temps retrouvé ».
Annick BOUILLAGUET, *Proust et les Goncourt- le pastiche du Journal*, Lettres modernes, 1996.

（3）ルモワーヌ事件のパスティッシュとゴンクールのテキストとの照合については，Jean MILLY, *Les pastiches de Proust*, Armand Colin, 1970, pp 153-170, とりわけ pp 167-170を参照のこと。また『見いだされた時』のパスティッシュについては，プレイヤド版の註を参照のこと。

（4）例えば，プルーストは1920年1月号の『新フランス評論』に発表された「フロベールの文体について」と題された文章の中で，偏愛する作家の文体の無意識な模倣の危険（例えばフロベール中毒）を指摘しつつ，意識的な文体模倣たるパスティッシュの「衛生的」効果について言及し，それが毒消しと悪魔払いの効果を持ち，それによって再び自身の独創性を見いだすことができると述べている（CSB, 594-595)。無意識的他者への崇拝（idôlatrie）とオナジナリティーとの緊張関係を

めぐる問題意識はプレーストのラスキンへの批判においても重要なトピックであったことを指摘しておこう。

(5) 作品中における，このパスティッシュの機能については，(2) であげたものの他に，Françoise Gaillard, « *Les célibataires de l'art* », in Jean-Louis Cabanès (éd), *Les Frères Goncourt : art et écriture*, Presse universitaire de Bordeaux, 1997, pp. 323-337. を参照のこと。

(6) 例えば，1918年2月19日付け，ジャック・ポレル宛書簡の中で (CorrXVII,120) プルーストは「マダム・レジャンヌの芸術は私の内面生活を満たしていました。ジェルミニ・ラセルトゥの悲しみは，私の人生において最も大きな悲しみの一つであり，今でもなお私はそれに苦しみ，何時間もあの痛切な声の思い出に感動することしばしばなのです」と打ち明けている。

(7) Michel.R.Finn, « The Goncourts and Marcel Proust », *French Studies, Volume LI*, 1997, p.295.

(8) 保苅瑞穂，『プルースト・印象と隠喩』，筑摩書房，1982. とりわけ第三章「想像する眼」を参照のこと。

(9) CSB,372-382. 初出は「フィガロ・リテレール」紙1954年3月27日号。

(10) 例えば，CorrI,369.やCorrI,443.を参照のこと。

(11) CSB, 445-455.

(12) CSB,450.

(13) RTP I,532-534.

(14) BOUILLAGUET, op.cit.

(15) エドモンの遺言によってアカデミー・ゴンクールが完全版の出版を遂行すべく定められ，1896年エドモン死後20年後に出版が予定されていたにもかかわらず，再三の出版延長の末，1956年になってようやく遺言は実現された。

(16) 大公夫人とプルーストの交友については，例えばJean-Yves Tadié, *Marcel Proust*, Gallimard,1996,pp159-162.を参照のこと。

(17) 「大公夫人はテーヌに対して少々気をもみ，いらだっている様子であった。『両世界評論』に発表されたナポレオン一世に関する記事が原因だった。記事の中で，ラエテシア夫人に対して，テーヌはその不正を批判したのであったが，それに大公夫人は憤慨し，こう叫んだ。「やってやりますとも。テーヌ夫人の所に訪問の予定があります。《P. P. C.(おいとましたく)》と書いたカードを置いといてやりますとも。そう，金輪際，お会いすることはないでしょうよ。」

(18) 「大公夫人はテーヌと，彼が出版した『ナポレオン・ボナパルト論』が原因で仲違いをすることになる。テーヌの晩年の出来事である。テー

ヌは夫人にこう言った。『お読みになって下さい。感想をお聞かせ下さい。』彼は論文を送り，夫人はあの独立不羈の恐ろしいページを読むことになる。そこではナポレオンが傭兵隊長のように描かれていたのだった。その翌日，彼女はカードをテーヌに送ったと言うよりも，より正確には訪問の予定のあったテーヌ夫人のもとにカードを置いたのである。そこにはただ一言《P. P. C.》と記されていたのである。それが大公夫人の返事であり，もう金輪際来訪することは無いという意味であった。」

(19) 「『絶対に私はあなたにこのことを許すことは無いでしょう』と，彼女がドミトフ公と結婚してロシアに着いたとき，この言葉をもって彼女を迎えたのであった。」

(20) 「彼女がドミトフ公夫人としてロシアに着いたとき，大公夫人を令息の結婚相手にと望んでいた，叔父のニコライ皇帝はこう言った。『絶対に私はあなたにこのことを許すことは無いでしょう』。」

(21) 「ドミトフのことでは，ニコライはその名を口にすることさえしたがらぬのでしたし，また事実決して口にしませんでした。護衛も従者もつれずに，晩餐にふいにやってくることがありましたが，それは恐ろしい晩餐でした。ニコライはドミトフの顔を見ようとさえしないのでした…とうとう，ある日，皇帝は私にこう言ったのです。『今晩はどうして私に打ち明け話をしないんですか』それでも私が話したがらないので，こう付け加えたのです。
『私の力が必要な時には，いつでもお役に立ってあげますよ。オルロフ公を通して，直に私に話して下さい』。」

(22) 「彼はドミトフを忌み嫌っており，その名が自分のいる所で口にされるのを禁じました。時折，前触れなく姪の所に晩餐に来ることがありましたが，その夫の顔を見ようとさえしなかったのです。皇帝は夫人が不幸とおもんぱかって，こう言ったのです。『私の力が必要な時には，いつでもお役に立ってあげますよ。直に私に話して下さい』。」

(23) BOUILLAGUET,op.cit., pp 28-29.

(24) RTP II,835.

(25) CSB, 506-520.